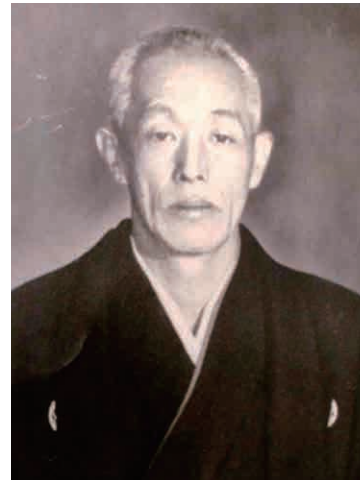




先見の明と すぐれた商才で 時代を生き抜く

たじま とめきち
田島 留吉



株式会社 丸エム製作所

本社所在地：大阪府大東市野崎4-7-12 従業員数：180名 資本金：1億5,785万円
創業：1927(昭和2)年5月 設立：1951(昭和26)年7月
事業内容：ねじ類、冷間プレス・切削部品、精密圧延・伸線、高強度樹脂製品、割ピン、工具・金型、アッセンブリー ほか、あらゆる工業用ファスナー・パーツ類の取り扱い・製造販売、医療機器製造

漆器問屋の腕利き番頭

丸エム製作所の創業者・田島留吉は幼くして大阪にある老舗の漆器問屋に奉公に出された。厳しい生活の中で商売のイロハを身に付けた留吉は、やがてその店の番頭にまで出世し、堂々とした風格と商才で周囲から一目置かれる存在となっていた。また、時代の流れを読む力と行動力にも優れ、当時まだまだ情勢の安定していなかった中国へ渡って漆の仕入れ先を開拓するなど、奉公先に大きな利益をもたらしたという。しかし、そんな八面六臂の働きを見せていた留吉の眼差しは、すでに別の新しい事業へと向けられていた。

1927(昭和2)年、時の大蔵大臣の失言に端を発する『某銀行が破綻した』という誤報が全国に広まり、銀行に多くの人が詰め寄り取り付け騒ぎが起こるなど、日本経済は後に昭和金融恐慌と呼ばれる金融危機に直面していた。当然、漆器などの贅沢品は売上が落ち込み、腕利きの番頭として名を馳せた留吉であっても、この状況を覆すことは難しかった。漆器のみならず、不況下においては贅沢品・嗜好品は、他の商品に先行して大きく影響を受けてしまう。当時、それはある意味においては漆器を扱う商売の限界でもあった。留吉は自分の扱っている商売の特性を理解し、いつかは到来するだろう不況の時代に備え、別の商品で自ら事業を興すために、番頭として多忙な日々を過ごしながらも、常に様々なことへアンテナを伸ばし続けていた。



昭和初期の九条新道の様子

「漆器」から「割りピン」へ

そんな中で、留吉が目をつけたのは「大八車」だった。大八車は江戸時代からある人力車だが、昭和初期の当時は荷物の輸送に広く使われており、番頭として店を取り仕切っていた留吉も、毎日のように往来を行く大八車を目にしてきた。もちろん、その景色を漠然と眺めていたわけではなく、留吉が目にしたのは大八車の車輪止めとして使われていた「割りピン」だった。大八車だけでなく、当時普及しつつあった自転車や自動車にも欠かせない部品であった割りピンだが、商売としてどれほどの勝算があったのかは判然としない。しかし、行く末の暗い漆器の商いでは、自分の家族を養うことさえできなくなるのは自明の理で、留吉は一世一代の大勝負として「漆器」から「割りピン」へと大きく商売を転換することを決意した。こうして、1927(昭和2)年5月、留吉は大阪市西区立売堀にあった金物製造業『丸エム製作所』を買い取る形で創業し、割りピン製造の個人商店をスタートさせた。



大八車

江戸時代から昭和初期にかけて荷物の輸送に使われていた。



割りピンとは…

半丸線材を曲げ合わせて断面形状を丸くした軸部とリング状の頭を持つピンで、ボルト、リベット等にあけた穴に差し込み、足を開くことで、ナットの戻り、部材の落下などを防ぐために用いる。

「丸エム製作所」の出發

従業員数5～6名の個人商店としてスタートした留吉の率いる新生丸エム製作所は、当初想定していた大八車や自転車、自動車向けの受注に加え、ボルトやナット類の緩み止めとしての割りピンの実用化、および当時の日本経済を底上げした旺盛な軍需の後押しを受け、順調に業況を拡大していった。漆器問屋から割りピンの製造業へと、端から見ればあまりにも脈絡のない転換だったが、扱うものは変わっても遜色なく商売を軌道に乗せることができたのは、奉公から始まり番頭にまで上り詰めた留吉の商人としての確固たる基礎と商才の賜物だろう。

しかし、太平洋戦争において日本の敗戦が濃厚になるにつれ、割りピンの原材料となる鉄や真鍮の入手は次第に困難になっていき、丸エム製作所も開店休業状態に追い込まれた。小さな子供を抱える一家の大黒柱として、また従業員の生活を預かる経営者として、その頃の留吉の心中は、現代の我々の想像を絶する深い苦しみに襲われていただろう。それでも留吉は何とか終戦まで家族と会社を守り抜き、焼け野原となった大阪の街の中で、戦地より復員した後の2代目社長・田島喜代次と共に割りピンの製造を再開させた。原材料はおろか、その日の食べ物すら満足に用意できない状況下での再出発だった。しばらくは薄氷の上を歩くような経営を余儀なくされたが、その後まもなく勃発した朝鮮戦争の軍事特需の波にも上手く乗ることができ、事業はそこからV字回復していった。



【創業～】



【1957年～】



【2000年～】

丸エム製作所のブルドッグロゴマークの由来

ブルドッグはイギリス生まれの犬で、主人には忠実で温順、紳士的な性質をもっています。ふだんはおとなしい犬ですが、古来イギリスで闘犬として訓練された時代もあり、今もその気質には、激しい闘志と頑強さ、忍耐強さがうけつがられています。

丸エム製作所の製品はそのマークに恥じない「ブルドッグ」の血が通っています。忠実、頑強、粘り強いというブルドッグのすぐれた気質をこめた精度の高い強靱なねじ。それが丸エム製作所のブルドッグ印ステンレスねじなのです。
(同社HPより)

モータリゼーションと試練の時代へ

1 951(昭和26)年、丸エム製作所は株式会社に改組して新しいスタートを切った。あわせて留吉は代表の座を喜代次に譲り、その後の会社の発展は次世代に託されることとなった。

朝鮮戦争休戦以後、割りピンの需要はモータリゼーションの影響から、ますます拡大していたが、競合他社も増えてきており、いずれ利益面で頭打ちになるだろうとの懸念から、割りピンに代わる新たな商品の必要性が社内で高まっていた。新製品のアイデアを思案するなかで、喜代次は旅先の旅館の窓サッシを留めているねじが茶色く錆びついているのを目にした。当時のねじはほとんどが鉄製で、窓付近に使われているものは結露によって錆びてしまうのが当然という時代だった。しかし、喜代次はそれを見て「錆びないねじを作れば売れる」とひらめき、ステンレスでねじを作ることを決意した。当時はまだステンレスが世に広まり始めた頃で、素材開発や量産化のための圧造技術など、クリアしなければならぬ課題が山積していた。ただでさえ固く、かつ加工すればさらに固くなる性質(加工硬化性)を持つステンレスには、従来の圧造工具や金型では強度が持たず、自社で工具さえも開発しなければならないような状況だった。



式典であいさつをする田島喜代次



ステンレスねじ

錆びない「ステンレスねじ」の誕生

数々の課題をひとつずつクリアしていった結果、1957（昭和32）年、丸エム製作所は日本初のステンレスねじの開発に成功した。『これまで世になかったものを生み出す』ことが、企業にどれほどの恩恵をもたらすのかを、ステンレスねじはまざまざと見せつけた。高度成長期における住宅ブームの興隆を背景に、鉄ねじと違って錆びず、アルミねじよりも圧倒的に強いステンレスねじは、当初の思惑どおり窓サッシに使用され爆発的な売れ行きを記録したのだった。

以降、様々な困難を乗り越えつつ、同社は『全産業界のサポーターインダストリー』として、高品質な「ものづくり」、確かな「安心」、新たな「発見」を提供する企業へと発展・進化し続けている。現在もステンレスねじで国内トップクラスのシェアを誇るほか、創業製品である割りピンはもちろんのこと、高い絶縁性と耐久性により通信関連機器・施設などに多く使用される高強度プラスチックねじ「FASNY」、宇宙開発にも用いられたマグネシウム合金ねじなど、様々な素材を活用した締結部品を開発・展開し、また近年では、活躍の領域を自動車や医療・福祉といった分野にまで広げ、ねじ製造のノウハウ・経験・周辺技術といった総合力で、世界を驚かせる製品を次々に市場に送り出している。



プラスチックねじ「FASNY(ファスニー)」



マグネシウム合金ねじ

功成り名遂げて…

留吉は、往来を行き来する大八車から商機を見出して、不況下の社会でも事業を興し発展させるだけの先見の明の持ち主だった。だが、その慧眼をもってしても、今日の丸エム製作所の発展を予想することはできなかつただろう。

同社は2013（平成25）年11月に、医療分野への商品開発を加速させるため、研究開発拠点「M⊕Hテクノロジーセンター」を大東本社敷地内に竣工させた。医療分野での製品第1号となった「歯列矯正ワイヤ」は、チタンの新合金「ゴムメタル」を使用し、柔らかく、しなやかでありながら高強度で腰が強いという特性を持ち、これまで一般的だったNi-Ti（ニッケルチタン）製ワイヤ中心の治療に比べ、治療期間が半分程度に短縮でき、しかもニッケルを含まないのでアレルギーで困ることもないという、歯列矯正治療における画期的な商品となった。同社が金型や線材加工といった工程のすべてを内製できる多能工集団と設備を持っていたからこそ開発し得たものであり、その根底には、まったく知識のないところから割りピン製造をスタートした留吉や、素材研究からステンレスねじを開発した喜代次の魂が息づいている。このゴムメタルも、線材をつくるために蓄積してきた同社独自の伸線技術を聞きつけた大学教授からの依頼が製品開発のきっかけとなった。

同社はこれからも「結ぶ力」で、日本の産業界を支え、次代を担う製品を開発し続けていく。



M⊕Hテクノロジーセンター(左)と本社(右)

テクノロジーセンターから生み出される新しい開発製品群で異分野へも積極的に進出し、丸エム製作所は製品開発型企業としての新しい成長の歴史を重ねてゆく。